

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720031

研究課題名(和文) 社会進化論の影響を軸とした、近代中国と日本におけるナショナリズムと宗教の比較研究

研究課題名(英文) Comparative study of the influence of social Darwinism on nationalism and religion in Chinese and Japanese modernity.

研究代表者

住家 正芳 (Sumika, Masayoshi)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：60384004

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ナショナリズムと宗教を結びつけた主要な思想的背景の一つに社会進化論があることを、19世紀末以降の近代中国と日本の比較研究を通して明らかにした。具体的には、近代中国については清末以降、民国期の宗教論、中華人民共和国の宗教政策等を対象とし、近代日本については、明治初期のスポンサー受容以降の知識人による宗教論、ナショナリズムと宗教に関する第二次世界大戦後の議論等を対象とした。

研究成果の概要(英文)：This research revealed the presence of a social Darwinist logic in the modern conceptions of the relationship between nationalism and religion through the examinations of the cases in modern China and Japan. The subjects were the controversies over religion among intellectuals and the religious policies in the period from the late imperial Dynasty to the People's Republic of China. As to modern Japan, this research examined the influence of social Darwinian's works on the religious ideas of intellectuals.

研究分野：宗教社会学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：社会進化論 ナショナリズム 宗教

1. 研究開始当初の背景

(1) ナショナリズムと宗教の関わりについては、これまで数多くの研究が行われてきた。しかし、それらはナショナリズムと宗教がどのように結びついているのかを事例ごとに記述するものではあっても、そもそもなぜ宗教がナショナリズムと結びつくのか、あるいは、なぜナショナリズムは宗教を必要とするのか、というきわめて根本的な問題を問うものではなかった。

(2) 近代中国に本格的に西洋思想がもたらされたのが嚴復『天演論』(1898)による社会進化論の紹介であったことに表れているように、19世紀末、中国のみならず米国や日本においても大流行した社会進化論こそが、近代化によってはじめてグローバル化した思想であった。通俗化されて広まった社会進化論は、社会および国家どうしの関係を優勝劣敗の生存競争とする見方を助長し、競争を生き残る「強い」国家をつくるためには、宗教による国民の強固な統合が不可欠であるとの発想をもたらしした。そのような発想が、日本では国家神道や皇国史観、中国では清末の仏教復興、民国期の孔教会運動(儒教国教化運動)を生んだと捉えられるのではないかと、という発想が本研究の背景にある。だが、日本における社会進化論の宗教および宗教理解への影響については目が向けられていなかった。

2. 研究の目的

本研究は、上記のような研究状況を受け、ナショナリズムと宗教を結びつけた主要な思想的背景の一つに社会進化論があることを、19世紀末以降の近代中国と日本の比較研究を通して明らかにしようとした。

3. 研究の方法

19世紀末以降の近代中国と日本の比較研究を研究方法とした。具体的には、近代中国については清末以降、民国期の宗教論、中華人民共和国の宗教政策等を対象とし、近代日本については、明治初期のスパンサー受容以降の知識人による宗教論、ナショナリズムと宗教に関する第二次世界大戦後の議論等を対象とした。

4. 研究成果

(1) 本研究は、ナショナリズムと宗教を結びつけた主要な思想的背景の一つに社会進化論があることを、近代中国の事例(康有為、梁啓超、民国期の宗教論争、中国共産党の宗教政策等)および近代日本の事例(井上哲次郎、加藤弘之、加藤玄智、内村鑑三等)の検討を通して明らかにした。以下、公表した研究成果に限り、概要を記す。

加藤玄智と梁啓超における社会進化論
社会進化論の発想からは、社会および国家

どうしの関係が優勝劣敗・弱肉強食の生存競争として捉えられた。その競争を生き残る「強い」国家をつくるためには、国民の強固な統合が不可欠とされ、それを実現し得るものとして宗教が要請された。社会や国家の統合のためには、何らかの価値体系の共有が必要とされ、それを実現することが宗教に求められたのである。本研究では、国家神道概念の淵源とされる加藤玄智の宗教論に以上の論理を見出すことができることを示したうえで、同様の論理が清末から民国初期にかけての中国できわめて大きな影響力を持った梁啓超の宗教理解にも見出されることを確認した。

国家神道については、「戦時中、神社参拝を通じて信仰を強制し、憲法で保障する信教の自由は極度に侵害され、国家神道がいわゆる軍国主義の精神的基盤になっていたことは一般に顕著な事実である」ともされ、周知のようにこうした理解の妥当性が議論され続けている。たとえば阪本是丸は、国家神道は戦前の政府が行政上の都合によって成立させたものであって、神社や神職とそれを崇敬する国民、さらに天皇による皇室祭儀とも関係ないとする。新田均によると、このような「国家神道」概念は陸軍大学校教授をつとめ東京帝国大学神道講座の教官も兼任した加藤玄智の「国家的神道」論に由来する。そして新田は、それは神道の「あるべき理解、あるべき姿を主張している」のであって、現実の神道とは本質的に無関係であったとする。新田と阪本は、加藤や戦前の官僚たちにとっての「あるべき姿」が、戦後になってまるでそうであったかのように捉えられることを認識の錯誤として批判するわけである。だが、国家神道の歴史の実態がいかなるものであったのかとは別に、少なくとも加藤玄智という一人の知識人によって、それが「あるべき姿」とされ、特定の価値体系に「神道」という名を冠して、その価値体系の国民による共有を図り、国家の統合を実現しようと企図されたことは確かである。

このような企図は日本の知識人だけのものではない。加藤玄智と同じ1873年広東省に生まれ、戊戌政変後、日本に亡命した梁啓超は、1899年5月、やはり同い年の姉崎正治に紹介されて哲学会春季大会の壇上に立った。そこで梁啓超は師の康有為の説を祖述するかたちで、今現在、東方を振興しようとするなら「孔教の本旨」即ち孔子が論じた真の教えに立ち返るべきことを論じた。清末から民国初期にかけての中国では孔教運動という、孔子を教祖とするものとして儒教を明確に「宗教」化し、その国教化を目指す運動が展開された。康有為が1890年代には提唱し、辛亥革命後に政治的な運動に発展した。これもまた、孔教という価値体系の共有による国民統合を企図したものである。1899年の梁啓超はその宣伝役を積極的に買って出ているのである。

こうした企図が生じた要因のひとつとして、本研究では19世紀末から20世紀初頭にかけて世界的に流行した社会進化論に焦点を当てることとした。先述のように19世紀末に西欧思想が中国人によって中国語に翻訳され、本格的に論じられた先駆けは嚴復の『天演論』である。これはT・H・ハクスリーの著作の翻訳のかたちでハーバート・スペンサーの進化思想、すなわち社会進化論的傾向の色濃い進化思想も紹介したものであった。すでに康有為から歴史を発展的に捉える三世進化の説を受容していた梁啓超はこれに大きな影響を受け、嚴復よりも平易な文体で社会進化論を清末中国社会の言論界に浸透させ、絶大な影響力を持った。

一方、日本においては東京大学に招かれたフェノロサがスペンサーの『社会学原理』第1巻にもとづいて社会の進化を講義して以来、スペンサーの著作の翻訳やスペンサーに依拠した著作の刊行が盛んに行われた。こうした社会進化論をもっぱら国家間の生存競争として敷衍したのが加藤弘之であり、その中で個人の道徳としての「国民道徳」を論じたのが井上哲次郎であった。加藤玄智はその井上を師として自らの宗教論を展開した。

このように、梁啓超や加藤玄智にとって社会進化論は前提的な知識であった。そうした彼らが宗教について論じる際にも、当然のように社会進化論が基底に存在し、彼らの宗教論をナショナリズムと結びつけるうえでも大きく作用した。国家や社会どうしの関係を「優勝劣敗」さらには「弱肉強食」の生存競争として捉える社会進化論の発想からは、「弱肉強食」の生存競争の中で国家が生き残るためには国民の強固な統合が不可欠であり、それを実現するためには国民の価値共有を可能とする「宗教」が必要であるという問題意識が、切実かつ明確なものとなったのである。

内村鑑三に対するベンジャミン・キッドの影響

「2つのJ」、すなわちJesusとJapanへの忠誠を誓った内村鑑三が、第一高等中学校での「不敬事件」のように、そうしたJesusへの忠誠(宗教)とJapanへの忠誠(愛国心)との深い溝に悩まされたことはよく知られている。本研究では、宗教と愛国心との葛藤の解決を内村がどのようなものに見出していたのかを検討することによって、19世紀末以降世界的に流行した社会進化論が宗教のとらえ方にも大きな影響を及ぼしていたことを跡づけた。1861年生まれの内村が生きた時代は、ダーウィンの進化論や、スペンサーに由来する社会進化論が世界的に大きな影響力を持った時代であった。当時名を馳せた社会進化論者の一人にベンジャミン・キッドがあり、内村はこのキッドの著作に大きな感銘を受けていた。そこで本研究では、内村がキ

ッドの著作のどういうところに宗教、進化論、愛国心という課題の解決ないしは解決の糸口を見出していたのかを検討した。

国家やある一定の地域社会など何らかの人間集団を一つの生命体としてとらえ、そうした生命体の生存競争として現実をとらえる社会進化論の発想からは、全体としての社会の進化や生き残りが大きな課題となる。

スペンサーにおいては、自由な競争を徹底させることが優先されたため、集団の中での個人、すなわち全体の中での個の自由が抑圧されることは否定された。

それに対してキッドは、全体の生き残りのために個人が犠牲となることは当然であるとした。そしてそのキッドにとって「西洋文明」であった全体は、内村においては「日本」さらには「世界の中の日本」と読み換えられていった。

こうした全体に対して個をどのように媒介するかについては、キッドの場合、個と全体を宗教でつなく、すなわち「西洋文明」とのつながりが自明とされたキリスト教を持ち出せば済んだ。だが、内村の場合、事はそう簡単ではなかった。個と全体を宗教でつなくのはよいとして、内村にとってその宗教にあてがうべきキリスト教は、内村にとっての全体である日本とは齟齬をきたすもの、あるいは齟齬をきたすものとして非難攻撃されるものであった。そのため、内村は全体としての日本をさらなる全体である世界の中に位置づけ直す作業を必要とした。

内村は、キッドにおける社会有機体としての宗教の機能、すなわち西洋文明にとってのキリスト教の役割に、世界の中の日本に対してキリスト教が果たすべき役割、さらにはそのために自らが果たすべき使命を見出していたといえる。そしてそこに、JesusとJapan、キリスト教信仰としての宗教と日本への愛国心とをつなぐものを見出していたとらえることができる。しかもキッドの論は、宗教と愛国心とともに、内村にとってのもうひとつの課題であった、科学としての進化論との調和的な関係をも示唆してくれるものであった。

新渡戸稲造と梁啓超のアメリカ旅行

本研究では、梁啓超のアメリカ旅行体験と、『武士道』の著者であり、植民学の教官でもあった新渡戸稲造を比較することによって、社会進化論的な発想が両者に色濃く影響したことを示した。

戊戌政変の失敗後、日本に亡命していた梁啓超は1903年、8ヶ月に及ぶアメリカ旅行に出る。その際、梁啓超がアメリカに見出したのは、さまざまな民族の融合や共生ではなく、多様な諸民族の競争と、優劣関係であった。

この体験は、梁啓超がアメリカ旅行前から身につけていた社会進化論的な、国際関係を優勝劣敗の生存競争としてとらえる発想を

強化することはあっても、弱めるものではないと
うていなかった。

そうしたアメリカの状況の中で暮らす梁啓超にとっての同胞である中国人たちに対して、梁啓超は厳しい評価を下し、そうした優勝劣敗の国際関係で国家・民族としての「中国・中国人」が果たして生き残れるのかと、強い危惧と焦燥を抱くこととなった。

一方、一般には、国連の要職について国際派の知識人であり、近代日本の代表的なエリート養成機関である一高の教養主義文化の礎ともなった人物と目される新渡戸稲造にも、社会進化論的な発想を見出すことができる。新渡戸は植民学の教員でもあり、植民地台湾での実務に關与するとともに、文化的文明的に「進んだ」民族が「遅れた」民族を指導すべきとの発想を示していた。ただしこれは、指導的な立場に立ちなければ文化的文明的に優れていなくてはならない、ということでもある。

(2) 上記の研究と同様の観点からの研究を日本や中国に限らず非欧米諸国にも広げることができる点が本研究の持つインパクトであり、将来的な展望でもある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

住家正芳「ナショナリズムはなぜ宗教を必要とするのか：加藤玄智と梁啓超における社会進化論」『宗教研究』(査読あり)376号、2013年6月、1-25頁。

住家正芳「内村鑑三はベンジャミン・キッドをどう読んだか：社会進化論の影響の一断面」『立命館産業社会論集』(査読なし)48巻4号、2013年3月、85-101頁。

Masayoshi Sumika, "Social Darwinism and Religion: The Cross-Cultural Experiences of Liang Qichao and Nitobe Inazo," Comparative Studies on Regional Powers, vol.13, March 2013, pp.185-195.

[学会発表](計1件)

住家正芳「内村鑑三におけるナショナリズム、宗教、進化論：JapanとJesusをつなぐもの」日本国際政治学会2012年度研究大会、2012年10月21日、名古屋国際会議場。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

住家 正芳 (Masayoshi, Sumika)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：60384004